
Sugarless Love

木更 葉哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sugarcakes Love

【NZノード】

N1520D

【作者名】

木更 葉哉

【あらすじ】

仲良きことは美しき哉。仲の悪きも、美しき哉。

深夜の部屋にて、くしゃみの音が響いた。うあーと情けない声を出しつつ、俺がティッシュに手を伸ばしたのは夜も夜、既に三時を過ぎたところだった。

「うー、さみい。……えぐしつ」

さつきより少々盛大なくしゃみ。涙で、ノートやらプリントやらの文字がにじんで見える。

試験二日前。徹夜一日目。冬の夜。ろくろく暖房の効かない部屋。まあ、起きるべくして起についた事態だろうとは思つ。一時間前の悪寒を感じたとき、やつぱりやめておくべきだったんだ。

うー……と、また手を伸ばし、ティッシュをつかみ出す。だいぶ減つてきている。さつき開けたばかりだったのに。消しカスや計算用紙も一緒にミミ箱へ放つたついでに、壁の時計を見上げたそのとき、不意にドアが開いた。

誰？！

……と振り返つたつて、こんな時間ノックもなしに入つてこようなんて人は、

「柚樹つ。えつ、あんた一体どうこうつもりなのつー？」

……やつぱり。姉さんぐらいしかいない。しかもえらい見幕だ。「つるせこいつたらありやしない。さつきつからもう、せきだのくしゃみだのひつきりなしに、冗談じやないわ。安眠妨害もこことじよ。気になるつたらない

「すつ、すいませんツッ。でつ、でもあの落ちつ、落ち着いてください、声が大き……」

「何ですつて？！」

反射的に謝つてしまつたものの……やばい。怒つてる。勢いに押されて、思わず机と背中がべたつと張り付いた。

「落ち着けですつて？ だつたらすぐ、すぐそのくしゃみを止めな

さー。寝られやしない。試験だか何だか知らないけどいい加減に寝なさいよ。しかもこんな寒い中にそんな適当な防寒？！ ふざけんじゃないわよ。わざわざ人を起^おすような風邪ひいてまで何やってんの！ そんな試験勉強なんて、今すぐ！ 今すぐやめてしまいいなさい……」

「ねーさん、でもあの……」

「つぬせこつ……」

完全に怒っている。いやまあそれも当然なんだけど、でもだからってこんなに怒るなんて。正直言つて予想外だった。ぶちまけたつて、せいせい嫌味の一つでも言つておわりだらうと思つていたのに。やばい、やばすぎる。このままじやとんでもないことにもなりかねない。いや今でも充分にやばいんだけど。

「いつ、いえあの……、『めんなさい』

たぶん今の俺、思いつきり引きつた顔してんじやないだらうか。そう思いつつも、とにかく謝る。これ以上に説教なんてされちゃかなわない。

……と。気が済んだのか、

「……ほり」

何やら寄越してきた。思わず受け取ると姉さんは、「じゃね。早く寝なさいよ。やるにしたつて、あんたその状態は効率悪すぎ」

言つだけ言つて、さつと自分の部屋に戻つていった。
隣のドアが閉まる音を聞いて、ホッと一息つぐ。血風一過。ようやく渡されたものを見る余裕ができた。

「……つて、風邪薬？」

と、水。え、えーと……。なんで？

薬とコップを手に数分間、俺は思いきりパニくつていた。

え、なんだこれ。いや、風邪薬つてのはわかる。たしかこれって、いつも買い置きしてあるやつだよな。うん、それはわかる。問題は、なんで姉さんがこれを持つてきてんのかってことだ。あんな元

気な人が風邪ひいてるわけないだろ？し、むしろ必要なのは今の俺にだろ。……つて、だからってそんな、あの姉さんが居間にわざわざ行くわけもないし。でもじやあこの薬はなんだ、現にここにあるじゃないか。まさか、いや、でもそんなバカな。そんなこと有り得ない。有り得ない……が、しかし。じゃあこの「コップはどう説明する。」これこそ台所にまで行かなきゃないはずだろ。つて、え、いやでもそんなまさか、ねえ。

……つて、嘘だろ？ そのまさかだつたりするわけ？！

「……マジかよ」

俺は、しばらく呆然としてた。まじまじと眺め続けてたその様子は、端から見たらこの上なく間抜けて見えたに違いない。頭の中は、思いつきリスクランブルだつたけど。

とはいえ、そんな間にも体は冷えていつてたよ？で。

「えぐしつ！！」

またくしゃみが出た。背筋がぞくぞくする。頭も痛い。やっぱし絶対エアコン壊れてるだろ、効きやしない。つて今はそれどころじゃない。ここはひとつ、ありがたく……。

姉さんの厚意だなんて、未だに全く信じられないけど。

結局その後、俺はそのまま薬を飲んで寝た。熱は測ってないはずなんだが、三十八度の文字が見えた気がしないでもない。あれはたぶん、きっと氣のせいだろう。

試験前々夜。俺はビリヤー、追い詰められても力が出ないタイプの人間らしい。風邪は治ったのに、もうビリヤーも無理っぽい。

今更やつたつて、なあ……。

あぐびついでに見上げた時計は、そろそろ日付が替わるのをしていた。きのうと似た、にじんだ視界。

「あきらめぢやおつかなー」

かなーとか言いながら、手はもうノートを閉じている。

といふか、ここんとこの突貫工事のせいで今、そのツケが回つきてたりする。なんていうか、つまり眠気ピーク。睡魔との勝負が現在進行形真っ最中で、少しでも油断したら「引きずり込まれ」てしまいそうだ。ま、もうしばらく我慢すれば抜け出せるとはわかってるけど……いや、でもほら。わかつてると実行するってのはまた別モノなわけで。ま、まだ明日あるしさ、全然だいじょぶだって。きのう結構やったし、明日少し遅くまでやつときや充分間に合うつて。よしーだつて、うん。大丈夫……たぶん。
「わいわい」と口の中で言い訳しつつ、ふらふらと机の上を片付けてると……おや、ノックの音。

「はいはい。……誰？ 母さん？」

いつもならもう寝てる人なのに、ヒドアを開けたら、

「ね、ねねつ、ねーさん？！」

予想外の人がいた。え、今日は俺、なにもしてないよ？！

「なに驚いてんの。別に取つて喰やしないわよ」

怪訝な顔で、器用にも片方の眉だけを持ち上げている。

似たようなもんだよ。

とはサスガに言えず、出掛けた言葉をぐつと飲み込む。
え、もしか酒入つてんの？ なんか顔赤いよこの人。髪に枯れ葉とかくつついてるし。……なにやつてんだ、一体。

「いや、えーとあの、ちょっと意外で」

できるだけ当たり障りない言葉を探す。

「なんかコートから冷氣出てるんだけど。今帰ったの？」

「だつて母さん、今日に限つてなかなか寝ないんだもの。やつと電気消えたから、さつきね。ちょっと今日遅くなつて十一時に家に着いたからさ、一時間中ずっと張り込みしてるようなもんだったわ。
寒いつたら、もつ」

「は？」

「どうもよくわからない。一体なんだってまたそんなことするんだ、素直に入つてくれりやいいじゃないか。

「だつてさー、父さんほどじゃないにしても母さんだつて遅いとかなんとか、あれこれ細かく言つてくるじゃない。いちいちほつといてよ、とか思うけどそもそも言えないしさ。だからいつそ寝るのを待つて忍び込もうかな、とね」

「忍び込もうかな、つて、姉さんアナタね……。え、でも全然ドアの音なんて聞こえなかつたけど」

「そーなんだよね。今日の出がけ慌てたから、ついカギ忘れちゃつて。しかもあんたまだケータイ持つてないしや。うわーとか思つて家の周りぐるぐる廻つてみたら、ラッキーなことにフェンス沿いの窓が開いてるじゃない。で、ちょっと高めだつたんだけど、そこからなんとかね」

俺の姉さんて人は案外、ものすごく突飛な人なのかもしれない。もう俺は、へえーとしか言えなかつた。そんな理由で自宅侵入したりとか、普通はしない。と思うんだけど。

「ま、まあいいんじゃないの？」ともかく入れたんだし」

そんな俺に姉さんは、まあね、ヒーヤツと笑つて、

「で、あんたはもう寝るの？ 机の上片づいてるけど」

ひょいと部屋を覗き込んでそう言つた。また勝手にこの人は、

もう。こーゆーとこ昔つから変わつてないな。

「え？ ああ、明日遅めまでやつとけばいいかと思つて」

「ふーん、そう。ま、具合も良くなつたみたいだし好きにすれば？」

まだ寒氣する？ 热測つたでしちゃうね」

「へ？ あ、うん。なんか大丈夫っぽい。平熱だつたし。別に寒気もない」

「あつそ。ま、せいぜいお大事にね。じや」

葉っぱをつけたまま、姉さんは部屋に戻つていつた。やつぱりあの人とのテンポは、いまいちよくわからない。

明日の支度をせねばとカバンを開けた俺は、眠気が醒めていることに気付いた。いつの間にピークが過ぎたんだか、すっかり頭がクリアになっている。今更眠れるわけもなく、しょうがないから明日のものを詰めるだけは詰めて、もう一度机に向かうと、またノックの音がした。

いや、ノックじゃない。少し低い音。たぶん足で蹴つ飛ばしてでもいるんだろう。乱暴だな、もづ。

「ちょっと柚樹ー。まだ起きてんでしょう。早くドア開けて」とい、なんて横着な人だ。

「はいはい、ただいま。なんですか……」

自分で開ければ？ だの、今まで勝手に入ってきた癖に、だんて言つたら後が怖い。我が身大事。こーゆー場合は黙つて従つとくに限る。

ドアを開けたら、やつぱり両手のふさがつた姉さんが立っていた。

ただ、その、持つてるものが意外で。

「なによ。文句でもあるの？」

「いや別に。でも聞いていい？ なにそれ」

「ケーキとコーヒー。見てわかるないの？」

いや、わかるけど。そういう問題じやないです。

「あ、紅茶の方がよかつたですか」

いやいや。そういう問題でもなくて。

「別に、ただの『お見舞い品』よ。……遅れたけど

軽くそっぽを向きながら、姉さんが言つ。

「さつきあんた見て、どうせもう少し起きてんだろうなって思ったのよ。実際いつまで経つても電気消えないしさ。別に明日渡したつてよかつたんだけど、ナマモノだし。傷んだら大事と思つて、さつさと渡しとこうと思つただけよ」

ほら、と皿とマグが押しつけられた。コーヒーが熱い。

ケーキは、俺の好きなチーズケーキだつた。

コーヒーは、少し濃いめに淹れてあるようだつた。

その一つを持った俺は、じゃ、といったそつけない挨拶で閉められたドアに向かつて「はあ、どうもそれは」なんて言つて、ずっと立ちつくしていた。

買ったばかりのケーキが、そんな急に傷むわけない」とぐらー、考えなくつたつてわかつてのことだった。

一日後、試験一日目、数学・日本史・現代国語。

一日目、英語・生物・古典。

案外、終わつてしまえば試験なんてあつけないものだ。

答案が返つてきて、悪夢の「答え合わせ」がやつと終わったころ、今度は姉さんのほうが忙しくなつてきたらしい。

「ま、いんじやないの？ 別に私には関係ないし。今の私には、そんなことに関わつてる余裕なんてないの」

成績の報告にそう返されたのは、たしか一週間前。ここ最近の姉さんは、夕食もそこに部屋に戻る。

隣の部屋からはエアコンの稼動音にプリンタの印刷音。CDはHDDレスに流れ続け、ベランダ越しの明かりは俺の起きている間に消えるのを見たことがない。なんでも、「レポート提出とゼミ発表が重なつた」らしい。きのうの夜、ちらつと見た姉さんの机の上は、山ほどのプリントと資料にパソコンが埋もれんばかりだった。

「うー……。もひ無理かもしない。レジュメはなんとかなつたんだけど、レポートあと二つも残つてんだわ。週明けの明日が提出なの」「どうしちゃってのよーーー。絶対これヤバイって」

姉さんが「一ヒー片手に、台所のテーブルでつづふしていたのはその翌朝のことだった。今朝も徹夜明けらしく、目の下には隈ができている。

テーブルにぐたりとへばりついて、

「そんなに大変なんだつたら、もつと早くからやつとけばよかつたんじやないの？」

「風邪ひいてまで徹夜してたアンタが言えるの？」

じろりと睨みつけてきた田は、正直ちょっと怖かった。

「ま、なんとかなるつしょ。まだあと一日あんだと思つて書けばいいじゃん」

「あんたヒトゴトだと思つて……」

「だつてヒトゴトだもん」

ふふんと笑つて部屋を出る。恨めしそうな視線が背中に痛かつた。

「もうイヤだ〜〜〜〜！」

その日の夜。そろそろ寝よつとしていたら、どこからかそんな叫び声が聞こえてきた。少しばかり声に必死さが混じつているような気がする。音源はパソコンとじロのほうつて、なんだ。姉さんか。もう落としちやおうかな〜だの、やつぱ昼夜しそぎたか、だのとう、なんとも情けない声が歌詞の合間に聞こえる。こないだの飲み会帰りとは、えらい違ひだ。

聞かなかつたことにしてベッドに潜り込んだ。いちいち気にしないといられない。

「はあ。ごくろーさまです」

まぶたが重く、大きくあぐびを一つして、寝ることにしてたのだが。

「ちよつ、もう無理だつて…… 間に合わないので……」

「…………」

寝ようとしてから数時間。俺はまだ一睡もしていない。つとつとするたびに、ご丁寧にも隣人の声が邪魔してくれる。
なんだこの壁。こんな薄かつたつけ? しかもせつときよか声必死じゃないですか。

よっぽど切羽詰まつてでもいるんだね？

「どうにも気になつてしまふがな。レポートってそんなに忙づか
ないものなわけ？」

「…………。つたぐ、もひ

舌打ちを一回して起き上がつた。

「つー……、やみ」

背中がぞくりとする。やっぽどのまま寝てたいかも。

「つたぐ。踏んだり蹴つたりじやんかよ」

しうがねえな、と廊下に出ると、フローリングの床がべたつと
足に冷たかった。

午前四時、外はまだ暗い。

きつときのうちに、カーテンの隙間もひすり明るくなつてくる
んだろう。ああ、時間がない。いや、下書き原稿はできたが一体清
書するのほどいのぐらいかかるものか。間に合わなかつたらどうしよ
う、単位がもらえない。教授め、なんだ、いまどき「レポートは手
書き以外は受け付けない」って。

パソコンのプリンタからレポートの原稿が出てくるのを見て、私
がそんなことをぐつたりと考えていたそのとき、ノックの音がした。
不機嫌なまま、返事もせずにドアを開ける。

「…………俺だけだ」

腕組みした弟が立つていた。

「そんなの見りやわかるわ。なんの用よ」

「あのね姉さん。うるさいんだ、いい加減寝てよ
呆れたようにこつちを見やつてくる。

「つるつるさこわね。まだ清書があるのよ。それやんなきせ終わんな
いのー」

「いや、そんなの俺には関係ないし」

即答、しかも正論。肩すかしを食らって、なんだか妙に腹が立つた。いつそ言い争う気でいたのに、リズムが狂う。

「…………。冷たいわね、あんた」

予想外の動搖を隠して、短く言い捨てる。

「いーえー、そんなのお互いにさまなことじやありませんか。なにを今更」

にこやかな上っ面に比べて、口調はひぢくせつけない。

なんだか空しい気分になつて、わけもなく泣きたくなつた。

「それよか、なに、清書終われば寝てくれるわけ？」

懇懃な笑いは引っ込めて、同じ口調のまま聞いてくる。……弟の

前で泣くなんてそんなみつともないこと、できるわけがない。

「うん。…………清書が済むまで、『ごめん。我慢して』

声が震えて聞こえたのは、きつと氣のせいに決まつてゐる。せめて

目を合わせないよつにして答えたひり、

清書なら、俺が書いてやるから。

なんだか、とんでもないセリフが聞こえたような気がした。

「は？」

思わず振り向いてしまつた。出掛けた涙が引っ込む。まじまじと柚樹の顔を眺めたら、

「大丈夫、字はまともに読めるほうだし」

普通に真面目な顔だつた。…………つて、そうじやなくて。

「徹夜続きなんだろ？ あんまし体に悪いんじゃないの？」

いやいや、そういうことでもなく。どうしたのを急に。

「言つたつしょ？ 僕はね、姉さんに早く寝て欲しいの」

あつけにとられた私に向かつて、柚樹はニヤツと笑つてやつと云つた。

(後書き)

「J意見・「J感想等ありましたら、よろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1520d/>

Sugarless Love

2011年1月15日05時54分発行